改新の女

星極・斉明天皇私伝

田中富

改新（かいしん）の女帝

—皇極・斉明天皇私伝—

1986年8月1日　第1刷発行　〈検印省略〉

定価 1,800円

著　者　田中富雄

発行者　近藤博美

発行所　創芸出版株式会社

大阪市北区東天満2－9－4

〒530 電話(06)354-3626(代)

印刷・製本　株式会社 チューエツ

乱丁・落丁はお取替いたします。　© 1986

ISBN4-915479-18-8

目

次

序章　鬼火　5
第一章　落椿　15
第二章　夢の間に　35
第三章　二つの死　43
第四章　遺詔　60
第五章　五蘊皆空　71
第六章　火群　88

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第七章　白い蝶　112
第八章　大化改新　140
第九章　確執　175
第十章　有間謀反　204
第十一章　終焉の地へ　234
終　章　鬼になりて　256
あとがき　田中富雄　263
参考資料　266

装幀　倉本　修

序章　鬼火

宝皇女（たからのひめみこ）は、ふと目覚めた。夜はまだ深いらしく、燭の光もとうに切れた屏風の蔭は、どっぷりと眼の中に墨を流し込んだような闇だった。聞えるものは何もなく、庭の柳の木に巣作りしている雀が、寝狂いしたかのように二、三度羽搏いてそれきり静かになったのが、唯一の音だった。

皇女は何か不吉な予感に襲われてきた。脳天で打ち出す鼓動。耳底で鳴る血の流れ。冬のさ中だというのに汗が吹き出た。汗は胸から背へ、転げるように落ちて冷たい筋をつける。いく筋も、いく筋も——。

ふと、空気の揺れを感じる。皇女はあっと喉の奥を鳴らせた。一握りほどの蒼白い火を見たのだった。いや、見たように思ったのだ。それは瞬時にかき消え、忽ち元の闇があたりを埋めた。一呼吸、火が再び皇女の眼底で揺れた。その火明りに照らし出されたもの——ふり乱した頭髪、耳まで裂けた口、木乃伊（ミイラ）のように黒く乾からびた皮膚、そして裸形。

その一つ一つを、皇女ははっきりと見たわけではなかった。そう感じ、そう思ったに過ぎなかったが、奇妙に生々しい感じで皇女の心に焼きついたのだった。

〈鬼——〉

と皇女は思った。恐怖が、何か荒々しいもののように皇女の脳芯をめった打ちにして走った。そして、皇女は意識を失ってしまった。

朝の日かげが広廂(ひさし)いっぱいに射し込み、雀たちの囀りの中で、皇女は目覚めた。深更に意識を失った名残りか、頭が重い。

＜夢だったのかしら＞

と皇女は思う。しかし夢でなかったことは、毛穴のどこかに残っているらしい冷たい汗で感じる。

「お目覚めでございましたか」

采女が朝の挨拶にきた。彼女は皇女の顔色が少し悪いと言い、

「早朝から蘇我家の使いが見えまして、無事嫡男が出生したと報告していきました」

と語り加えた。

蘇我氏は大臣だった。今馬子(うまこ)がその任にあるが、その子蝦夷(えみし)も大夫として政事に参画していた。強大な軍事力と豊かな財力を兼ね備えており、今や帝の勢力をもしのぐ勢いだった。采女の言う嫡男とは、蝦夷の子のことである。

「今朝の丑の下刻（午前三時）に生まれたそうでございます」

「そう」

と頷いたあと、皇女はあっと小さく叫んだ。鬼の夢、いや、現実に鬼の姿を見たのはその時刻ではなかっただろうか。

蘇我氏の嫡男の出生と鬼の出現が同一時刻だったとしても、それがどうしたというのであろうか。

蝦夷の子――入鹿と名づけられると既に決められていたが、その入鹿が、自分の未来に鬼のような存在となるというのであろうか。

「今日は、山背王がお越しになる日でございます」

采女が言った。皇女は急に生々とした表情を取り戻した。

山背王は聖徳太子の長子である。皇女より一つ年下の十六歳だが、父太子に似て長身で肩巾も広く、もうどこから見ても大人だった。最近伸ばしはじめた髯は白皙の頤にもさほど目立たず、二、三本伸びた長いものを指でつまんで引き伸ばすしぐさが唯一の子供っぽさだった。話すことも太子の血を享けて学問的であり、皇女の人生や仏教に対する知識のほとんどは王から教えられたものである。

そんなことから皇女は、王を年下だと感じたことはなく、二つか三つ年上の、夫と選んで丁度いい青年だと思っている。それはもう永い間皇女の胸に温められてきた思いだったし、王の胸にも通じているはずだった。皇女の父の茅渟王も彼の父太子も、二人の将来を認めているふうで、そうでなくては、斑鳩から駒を急がせても一刻はたっぷりかかる飛鳥の里まで来るはずがない。

王はいつも昼少し前に来て、皇女の両親と一緒に昼餉をとる慣わしだった。その時にする父と王の会話が、皇女の学問の時間であるといえた。

その時刻までだいぶん間があった。だがいつものことながら、皇女は時間が足りない思いになる。別段もてなしの準備をするというのでもない。入念な化粧だけが皇女の時間を足りなくするのである。

皇女は急いで朝餉をすましたあと、銅鏡に向った。
皇女はこの鏡を磨くことが好きである。ほうと息を吐きかけておいて綿で拭う。鏡はきゅっと可憐に鳴って丸くふくよかな自分の顔を映し出す。その時、皇女は鏡に生命を感じた。鏡そのものが人間の顔であり、流れる雲であり、庭の小雀であり、万象であるように思う。
ところが、今朝の鏡には生気がなかった。鏡の輝きが皇女の胸に今一つ響かないのである。
〈鬼のせいだわ〉
皇女はそう思い、身をふるわせた。鬼はこの館に推参した証(あかし)として、この鏡から生気を奪ったに違いなかった。
皇女は采女に別な鏡を持ってこさせると、朱丹を頰と唇に帚いて化粧の具合を訊いた。
「いつもの通りですよ、お美しい」
と采女は言ったが、皇女は信じられない。自分の顔に輝きのないことを、皇女自身よく知っていた。この顔を見て山背王は何と言うだろうか。吉野の桜の花びらのような——などという言葉はもう王の口からは聞かれないだろうと思うと、皇女は絶望に打ち拉がれてしまう。
王はいつもの時刻に来なかった。彼を待ち受けていた昼餉は空しく厨に下げられて冷えていった。皇女の心も共に冷えた。もう王は永遠に自分の前に現われないのではないか、などとすら皇女は思った。ひょっとすると、王もまた鬼を見たのではあるまいか。もしそうなら、鬼はまぎれもなく二人の間に投げられた暗い影の象(かたち)なのだと思えて悲しかった。
昼を一刻ばかり過ぎて、何の前ぶれもなく王は皇女の部屋へやってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ご心配をおかけしましたので……」
王は両親に挨拶もそこそこにやってきたと言った。遅参の言訳を一言二言したが、皇女の耳は聞いてはいなかった。こうして会えただけで皇女は充分満足だった。
「わたくしの顔に何かついていまして」
あまり王がまじまじと見るので、皇女は心の片隅に押しやっていた黒い影をよみがえらせて訊いた。
「いや、いつに増してお美しいので――」
王はそう言って微笑した。
〈何もかも杞憂だったのだわ〉
皇女はそう思い、急にこみ上げてきたおかしさに笑い転げた。
半刻ばかり四方山の話をしたあと、二人は采女と王の舎人を連れて外出した。館の門を出て道を西にとると飛鳥川である。この川岸の若草の上に憩うことが皇女の春の楽しみの一つだった。二人の足は自然とその方へ向いた。
春一番が吹いたのはつい先日のことだったが、今日は殊に暖かだった。飛鳥川は深い緑をたたえて静かに流れていた。
皇女はこの澱みを愛する。内に湍るものを秘めながら、表面何気ない素振りで流れるこの静けさを愛する。
「この水のひとかけらを取って勾玉にし、首にかけたいような……」

皇女は言った。その通り――そんな返事が返ってくることを皇女は期待した。
「まろはこの澱みがきらいです」
王はそう言って小石を澱みに投げた。丸い波紋が幾重にも拡った。その最初の波紋が向う岸に辿り着いたとき、王は再び口を開いた。
「昨日までなら、まろも澱みが好きでした。今は、速瀬が好きです。己の心のままに叫び、喚き、泣き、怒る速瀬が好きです」
王の声はするどく且つ冷たかった。
〈いつもと違うわ〉
皇女ははじめて何かに気づいた。王の身辺に何かが起っている。澱みが速瀬に変わるにもそれ相当の理由がなければならないように、王の心に打撃を与える何かがあったと思う。もしかすると王も鬼を見たのではないのか。
「王よ、あなたはこの世に鬼があるとお思いですか」
皇女は思い切って訊いてみた。
「いると思います。何故なら、仏がいることを信じるからです。ものには両端があるように、鬼は仏のもう一つの端と考えてもいいでしょう。でも仏を見たことがないように、鬼も見たことがないから……」
王は自嘲するように唇の端で笑った。
「仏のように、鬼にも生はなくまた死もない」

王はまた小石を澱みに投げた。それはまるで澱みを打ち据えようとするかのように激しい力だった。

「なのに、人間は独り生まれて独り死に、独り来たりて独り去る」

皇女は自分の耳を疑いたいような気分だった。二人でいるとき、こんな淋しい会話をしたことがあっただろうか。王の言葉は大方仏典からの引用であろうが、皇女はそんな淋しいことは信じない。

「あなたのお側にわたくしがいます。わたくしが死ぬときも、王は側にいて下さいましょう。それがどうしてひとりぼっちなのでございましょう」

それは皇女の実感だったし、そしてまた王の実感でなければならぬはずだと思うのである。

「あなたは何にも知らないのですか」

王はあきれたように言った。

「あなたは田村皇子の妃となることが決っていることを知らないのですか」

「えっ、田村皇子とわたくしが……何と仰言いましたの」

王は答える代わりに小石を川に投げた。

〈あなたは田村皇子の妃なのだ〉

王の無言の言葉をはっきりと皇女は聞いた。

「わたくしの知らぬ間に……、誰が……」

決めたことなのだろうか。父自身の意志によって決定されたものだろうか。まさか。

「あれっ、誰か――」

二人から離れて遊んでいた采女の上ずった声が聞えた。見ると、摘んでいたつくしか何かを空に撒き散らしながら馳けてくる。馬の手入れをしていた舎人が、采女の方へ走った。采女は川岸を指して何か叫んだ。舎人は指の向いている方へ走っていき川面をのぞいた。舎人は大慌てに慌てて馳け戻ってくると、王に何か耳打ちした。

王は剣の柄を握って馳けて行った。王の脚結いの小鈴がさわやかに鳴った。何か重大なことが持ち上ったらしい気配と、その鈴の音は溶け難い違和感を皇女の胸に植えつけた。

王は舎人に促されて川面をのぞいた。王の顔から血の気がひくのが遠目にも見えた。皇女は裳をからげて走り寄ろうとした。

「死人でございます。ご覧なさいますな」

と采女がとめた。

王は皇女のもとへ戻ってくると、

「急な用件ができました。これで帰らなければなりませぬ」

と駒にまたがって鞭をあてた。固くひき締った臀部の筋骨をぴくりと痙攣させて駒は地を蹴った。

「誰であったの。誰が死んでいたの」

采女は面を伏せて黙っていたが、やおら顔をあげると、

「黒猪という男です。皇女さまのお知りにならない人です」

と言い、ほろりと一滴涙をこぼした。

「あなたはどうして――」

「わたしと同じ里の男です。黒猪は太子さまの志能便(しのび)でした。蘇我さまの館へ忍んでいたのです」
「それじゃ……」
「はい、身許がばれて殺されたのでしょう、きっと」
時の政事の実権を握る蘇我馬子と、聖徳太子の確執は皇女も勿論知っていた。数年前、太子が冠位十二階制を制定したのも、十七条の憲法を発布したのも、馬子を牽制するためだった。豪族たちを冠位によって格付けし序列化しようと意図したのはよかったが、馬子だけは最高位の大徳の上にある存在として認めねばならなくなり、馬子をも含めて序列化しようとした太子の意図はもろくも崩れ去った。
十七条の憲法などに至っては、馬子は全く歯牙にもかけず、
「書物の虫のたわごとじゃ」
と笑いとばしたと聞いている。当時太子は三十一歳で、馬子の五十二年の年輪の重みに押しひしがれたと噂された。
太子が馬子の反対を押し切って派遣した遣隋使が、帰途百済を通過するとき、隋の煬帝から授けられた国書を掠取されるという事件があったが、あれは馬子の指令によって百済人が襲ったのが事実だと囁やかれていた。
馬子はその噂に反論し、貰ってもいない国書を百済人に奪われたと申し立てて蘇我氏の立場を悪化させようとしているのだ、と非難した。
どちらが真実なのか、皇女など女の知るところではなかったが、こういう争いを聞くにつけて悲

しさで胸がいっぱいになる。太子の夫人刀自古郎女（とじこのいらつめ）は馬子の娘であり、義理とはいえ親子ではないか。その二人が、謀略をもって争わなければならない人間の宿命を、皇女は呪う。

近頃、太子を皇太子の位置から追放しようとする動きが馬子の側にあった。あれやこれやで互いに志能便を入り込ませてさぐり合っているのだが、その犠牲となって殺された黒猪という男こそ哀れだった。

皇女は、自分と山背王との仲が引き裂かれようとしているのは、これもまた馬子の圧力ではないのかと思った。自分がどう喚き、どう泣き叫ぼうとも、もうどうにもならない運命を感じた。自分は蜘蛛の巣にかかった小さな蝶のような存在でしかないようにも思う。自分がこの世で一番尊く力強いと思うもの――燃えるような激しい愛情をも、全く無力にしてしまうものが、この世には存在するのだと考えると、もう生きていても仕方がないとすら皇女は思う。

山背王が馳け去った飛鳥川沿いの道には、春埃りがまだ舞っていたが、王の姿はもうどこにもない。遠く遠く、皇女の手の届かない飛鳥野の彼方に、王は去ってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com